

2. 【第二部】 パネルディスカッション

【総合司会】

宮崎伸光（法政大学学生センター長、法学部教授）

【コーディネーター・司会】

木原章（法政大学市ヶ谷ボランティアセンター長、経営学部教授）

【法政大学・パネリスト】

原伸子（多摩学生センター長、経済学部教授）

土屋貴之（学生センター・市ヶ谷学生生活課）

鎌田紫織（課外教養プログラムプロジェクトリーダー、文学部・英文学科4年）

【関西大学・パネリスト】

大島薫氏（学生センター副所長、文学部教授）

早川亮馬氏（学生サービス事務局・学生生活支援グループ）

上野俊行氏（ピア・コミュニティ運営本部副本部長、商学部・商学科4年）



司会・木原 高いところから座ったままで失礼させていただきたいと思います。連続シンポジウムということで、去年は大島さんがコーディネーターを務め、私がそちらにいて聞かれたことに答えればよかったのですが、今回は私がコーディネーターを務めさせていただきます。

この「連続」には意味がある、ということがようやくわかったのですけれども、要するに「支援される側」が「支援する側」に回らなければいけない。まさにそのための連続だったということは、今初めて理解できたわけです。敬称等は省略して、私も若輩者ですから「さん」付けで呼ばせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

今日の流れですが、法政大学、関西大学両校のGPは今年が最終年度となり、来年からはありません。GPというのは、金銭的な支援だけではなく、「GPをやるんだ」という使命感、或いは大学において色々な意味で都合をつけられる、そのような特権、特異な状態があったわけです。それがなくなった後にどう続くかを考えるために、教員・職員・学生、両校の代表の人に出ていただいて、この4年間どのようにプロジェクトに関わってきたかということについてお話をしてもらいたいと思います。その前に、この3年半を振り返って「一番印象に残ったことは何か」を一言ずつ自己紹介も兼ねて、大島さんからお願いできますか。

関西・大島 関西大学の大島でございます。私がこの取組に関わって一番変わったことというのは、これまでは所属学部における専門教育を中心に大学教育というものを考えていたのですけれども、そうではなく私どものような私立大学でこれから行っていかなければいけないことというのは、これまでの専門教育以外にもあるのではないかと強く感じるようになりました。以上です。

司会・木原 続いて早川さん。早川さんは関西大学の学生センターで、中心となって関わってこられた方です。

関西・早川 関西大学の早川と申します。手短かに申しますと、まず4年前と変わったことは、業務量がすごく増えました。これが一番変わりました。業務の中身で変わったことと言いますと、私は事務職員ですので、事務的

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

なことを多くやってきました。GPをいただくまで奨学金も担当しておりましたので、奨学金の説明会といった学生に説明をする形でのサービス、支援をしていたのです。今回は「教育的側面」をすごく持ったのではないかと感じております。授業もそうですし、養成、研修、色々な講座の中で私自身が先生という立場になりながら、ワークや前に立ってお話をしていくという点では、すごく変わったのではないかと感じております。以上です。

司会・木原 どうもありがとうございます。続いて、関西大学の上野さん。

関西・上野 関西大学・商学部4年生の上野俊行と申します。本日はこの場に登壇させていただくという形で、学生としての意見を述べたいと思います。この3年間で一番変わったことは、コミュニケーション能力や問題解決能力といったものが身についたと思うのですが、何より自分のコミュニティ、知り合い、関係が広がったことです。今隣に座っている早川さんや大島先生とも、普通の学生生活ではできなかったであろう関係がつくれて、冗談まで言い合える仲になっていると思います。また、先ほど手をあげてくださったように、今日も先輩が来てくれている、自費で来てくれた後輩がいたり、先ほど登壇した同級生がいたり、そういった意味で敢えてこの言葉を使いたいと思うのですけれども、この3年間で一番変わったことは、僕にとっては「友だちが増えたこと」とさせていただきたいと思います。

司会・木原 ありがとうございます。まさにコミュニティができたということですね。原さん、どうですか。

法政・原 法政大学の多摩キャンパスの学生センター長をしております、原です。私は去年の7月から学生センター長をしているのですが、それまでは学部で専門的、社会的に考え、閉じ籠っていたのですけれども、さきほど関西大学のメッセージにありましたように、私自身も広がっていったのではないかと感じております。それはやはり「実践の力」だと感じております。それと「ピア・サポート」。これは私というよりも学生もそうなのですが、ピア・サポートのような理念、「自立」となっておりますけれども、その自立自体はこういう個人化した社会の中で他者との協働があって初めて自立ができる、という意味を実感しております。教員・職員・学生のコミュニティという、大学本来の姿が実現しつつあるのではないかと感じております。以上です。

司会・木原 どうもありがとうございます。続いて、関西大に早川、法政大に土屋、この2人によってかなり色々な業務が行われてきました。では、土屋さん、どうぞ。

法政・土屋 法政大学・学生センターの土屋と申します。4年間関わってきた中で、私は「教員への印象」が変わりました。誤解のないように言いますと、もちろん一番印象に残ったのは「学生の力」です。その学生の力を引き出すためには、私たち教職員にスキルが必要で、またスキルとは別に熱意も必要だと思います。そうした中、特に学生センターは教員とも関わる人が多い部局でしたから、その教員の皆さんが考えている学生支援への熱意に日々触れながら、この4年間、それを励みに業務にあたってきました。

司会・木原 どうもありがとうございます。続いて法政大学の学生、鎌田さん。

法政・鎌田 私は課外教養プログラムプロジェクト（KYOPRO）でリーダーを務めております、法政大学・文学部英文学科4年の鎌田紫織と申します。私は3年生からこの活動に関わっています。1年半の活動を通して変わったことと言いますと、やはり上野さんがおっしゃっていたコミュニティが広がったというのと関係があると思うのですけれども、自分自身の視野が広がったと思います。課外教養プログラムプロジェクトには、文系の学

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

生も理系の学生も多く学部から参加していて、私にはない考えを持っている方がたくさんいます。そのような意見を聞くことで、自分の視野がすごく広がったと感じています。

司会・木原 どうもありがとうございます。私もこれで3年目の関わりになっているのですが、先ほどの発表を見ていただいてわかったと思いますが、企業の就職担当者に来てもらった方がいいのではないかと思います。採用の選別など一切やっていないのですけれども、こんなに元気がよくて素晴らしい学生に囲まれて、幸せな3年間だったと思います。

それでは質問票をいただいた中で、特にこのパネルディスカッションと関係しそうなものをピックアップしてみました。その中で、今の話を聞いていてわかったかもしれませんが、これは学生だけではなくて、なおかつ、職員だけでもなくて、学生・職員・教員が色々な形で関与して作られていくシステムです。ご質問の中に、それぞれの立場でどのように関与してきたか、というのがありました。まず、学生に聞いてみたいと思います。授業もアルバイトも、そして就活もある中で自分としてはどのくらいのエネルギーを使って、どのくらい関与してきたかについてお伺いできますか。では、上野さん。

関西・上野 その質問に対して、まっすぐな答え方ではないと思うのですが、僕はピア・サポート活動、ピア・コミュニティの活動も、僕の関大生の学生生活の1つでした。僕は他にもサークル活動、アルバイト、あと4年生なので春には就職活動もしていて、とても忙しい時期もありましたが、その時期も決してピア・サポート活動がなくなるということにはなかったです。それは、自分のやりたいことにチャレンジできる場であったと考えています。そのエネルギーはどのくらい使いましたかと言われてしまうと、他と比べると難しいです。

司会・木原 たとえば、ミーティングはどのくらいの頻度でやっていますか。

関西・上野 僕が所属している運営本部では、週に1回、1～2時間程度の時間をとってやっています。

司会・木原 大体どの時間帯ですか。

関西・上野 たとえば5限後、正課授業が終わったような時間に行われることが多かったです。

司会・木原 やはり、この活動は色々な学部の人参加していて、みんなで空いている時間にやろうよという、大抵昼休みか夜しかないのです。夜というと当然職員の人達が5時以降になりますし、学生はアルバイトがある。そのような時間に行われている。多分法政でも同じだと思います。では鎌田さん、お願いします。

法政・鎌田 どのように関わったかということなのですが、私はサークルには所属していないので、大学生活は、授業とアルバイト、KYOPRO。それと4年生なので最近までは就活を並行しながら、バランスをとってやっていました。今は就活が終わったので、KYOPROには100%で打ち込んでいるつもりです。

司会・木原 何年生からやっているの。

法政・鎌田 3年生の春からです。

司会・木原 それまでは何をしていたのですか。

法政・鎌田 それまでは留学をしていました。

司会・木原 上野さんは何年生から。

関西・上野 僕は2年生の夏休み頃から関わらせてもらっています。

司会・木原 正課授業のピア・サポートも取られたのですか。

関西・上野 関西大学のプログラムが授業の単位に認定されないということと、僕の課程が重複してしまっていて、どうしても正課授業を取らないといけない状況でしたので、授業では取れませんでした。ただ、関西大学のシステムの中で、正課授業以外で、連続で、授業と同じかそれ以上の時間で講師の方を招いてピア・サポートの授業をしていただき、それに13回出ることでサポーターとしてのスキルを身につけることができました。

司会・木原 これは、法政大と関西大の大きな違いの1つです。正課授業についてご説明いただけますか。

関西・大島 私どものGPでは、ちょうどその採択時に大学の全学共通教育の改革が行われておりまして、新たな科目を立ち上げるチャンスがございました。ぜひ、学生の意識の向上やピアの精神を芽生えさせる、そういうきっかけになるような「人間力育成」というものの中に、このGPの取り組みと共に参画することはできないかということで、ご相談いたしましたら新たな科目として開講が許されたのです。

その中でピア・サポートと申しまして、中学校や高等学校で若干経験した学生もおりましたけれども、多くの学生は一体どんな活動であるのか知らない状況でした。ですから、まずは全学の全学部の学生を対象とする授業として開講するというのがきっかけでございます。内容としては、初年次教育にあたるものであるかと思うのですがけれども、コミュニケーションスキルとかプランニング、青年心理に関わることが実際の授業内容となっておりますけれども、始めたばかりの取り組みでしたので1年生から4年生まで受講できる授業として開講しております。

司会・木原 どうもありがとうございます。この点は法政大学ではないことなので、関西大学のスタッフの多くの方は、授業でまず「ピア・サポート」について学んで、それからこういった実践的な活動に入っていくということです。そうでない人ももちろんいるようではありますが。

法政の場合は、いきなり「やりたい人いませんか」と募るわけですが、いずれにしても学生が集まってくると現場で色々と細かくお付き合いするのが、特に学生センターの職員の早川さんや土屋さんですけれども、早川さんはどんな感じで関わっているのか説明していただけますか。

関西・早川 関わり方としましては、上野が2年の夏から活動したと言いましたが、本学が「ピア・コミュニティ」を立ち上げたのが2年前です。ちょうど平成20年10月頃から立ち上げの動きがありまして、今日来てくれています「運営本部」と「KUブリッジ」のコミュニティが初めに2つ立ち上がりました。その時に関わりましたのは授業を受けた受講生です。授業以外でも正課外といたしまして講座を開講し、受講生を対象に、一緒にどうやったら学内に色々なコミュニティができるか。逆に、どういうニーズがあって、どういうサポートをしていったらいいのか話し合った経緯があります。そこからスタートして、今の8コミュニティまで、徐々にですが関わってきたというのが実際です。

司会・木原 関われば関わるほどやるが増えていくというのはよくある例なのですが、今時間的にはどのくらい割いていますか。

関西・早川 9～17時の定時で想定しますと、時期にもよりますが6～7割は関わると思います。このシンポジウム前は10割でした。

司会・木原 関われば関わるほど反応があるというのは関わりがいがあると思いますが、土屋さんはどうですか。

法政・土屋 「学生のことを第一に考える」というのは学生サービスの基本ですが、その中で今回のように文科省の採択を得たような事業は成果や実績を求められますので、いかに難解なコンセプトを自分なりに理解して、学生にわかりやすく伝えるかという作業に務めてきました。

司会・木原 法政の場合は正課としてのピア・サポートの授業がないから、担当する教職員の方がその場でイントロダクションのようなことにかかなりの時間をかけないといけないことがあるのです。その辺はどうですか。

法政・土屋 確かにそうですね。4年間KYOPROに関わってきました、目の前の学生というのは、言ってみたら「僕を映す鏡」みたいなものだと思います。学生が理解していないと自分の説明がダメというか、自分がちゃんとコンセプトを理解して学生に伝えて、初めて学生が生き活きと活動できる。「学生が学生を支援する」と一口に言っても、何をやっていいかわからないと思いますので、大学の目指すものを自分なりに理解して、学生に伝えて、しっかりコンセプトを共有して、その中で学生が力を発揮するようなものを学生自身でつくってくれればいいなど、そういうスタンスでやっています。

司会・木原 どの大学でも学生の課外活動を支援するために教員が自ら希望するわけではなく、順番など色々な要素で回ってきて、教員はよくそれを雑用と言っています。そういう立場に大島先生も自分から望んで来られたわけではないと思いますが、結果としてどんな感じで関わることになりましたか。

関西・大島 私もこの企画「学生支援GP」を申請しようという話が出ました時に、企画に関わりながら「ピア・サポート」を選んでしまったことというのは、採択された後、随分悩みました。これまで大学になかった新しい組織づくりを1からやることの難しさを随分感じました。

私の学部での研究領域が教育学でも心理学でもなかったものですから、今日森川さんもいらっやっていますけれども、ピア・サポート学会のサポーター養成講座に実際に参加したり、各種の研究書を読んだり、事例集を漁ったりするようなことが採択された後に続いたことを覚えています。

ただ、この取り組みについて先ほども申しましたように、関わってとても幸せだったと思っています。正直なところ、年々変わりつつある学生気質というものに教室では戸惑うことも多かったのです。何となく個人主義で、1人であることを好む学生たちの様子を教室でしばしば目にするたびに、これからはこういう学生たちに対する教育をどんなふうに行うか考えなければいけないのと思っておりましたので、この取り組みに出会えて、こうやって今日法政大学でピア・サポートを行っている学生さんたち、うちの学生たちの様子を見ていて、このような組織ができて良かったなど、正直苦労は多いですけども感じています。

司会・木原 本当に学生の個性が多様化する中で、従来のサークルやゼミというものの機能はいまひとつ明確で

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

なくなっています。学生さんたちに言わせると「友達ができた」とか「人を助けるというのが楽しかった」です。考えてみれば、本来それがコミュニティなのですから、それが今更ながら新鮮に感じるということです。本来のコミュニティというものが、こういうことを通じて作れてきたような気がします。

特に多摩ですとボランティア関係の関わりが一番大きかったのではないかと思いますけれども、関わってみてどうですか。

法政・原 多摩キャンパスは先ほど学生の報告でもありましたように、市ヶ谷から1時間半くらい離れた山の中、町田の条例で緑地の保全、厳しい規制のある所に非常に広大な敷地があります。

多摩の場合は特に「地域性」というのがありまして、ボランティアセンターは今年の4月から立ち上がったのですけれども、ボランティア活動自体は非常に長い歴史を持っております。多摩キャンパスには経済学部、社会学部、現代福祉学部、スポーツ健康学部がありますが、特に現代福祉学部と社会学部を中心とするサークルは、地域の町田地区、相原地区と非常に深い関わりを長く持っております。ですから地域の関わりが前提となっておりますので、ボランティア活動に関しては意外と立ち上がり後も非常にスムーズに進んでおります。これは、市ヶ谷と多摩と形成されている道筋が随分違ってきています。今日色々な報告を聞いて感心したこともあるのですけれども、私個人としてはボランティアに参加する機会があったというのが、とても大きな成果だったと思います。

たとえば、多摩キャンパスの近くにドイツの学校の分校などがある町があるのですけれども、その高齢化が進んで特産の柚子絞りがなかなか難しいという所に学生と一緒に出かけたり、夕張のボランティアに参加したりしました。自分の時間の9割か9割5分は学生にとり合っていますので、時間的にはタイトできついものがありますけれども、やはり参加すると学生の姿が非常に輝いていますし、人とのつながりは大切なのだと思いました。特に柚子絞りに参加した約20名の学生がほぼ1人で参加しているのです。結局そこで友達を見つけて、帰りは2、3人とつながりができていると言います。それは非常に感動的でした。学生のそういう姿をボランティアを通じて見るのができたというのは私の喜びですし、学生の姿も別の見方ができるようになったということです。

司会・木原 どうもありがとうございます。この間、前期の授業に対する学生の授業評価が出てきました。私は昨年、一昨年と市ヶ谷の学生センター長をやっていたもので、実は減免で授業をやっていなかったのですが、久々に今年授業を始めて授業評価を見たら、えらく評価が良くなっていました。これはもしかして、学生の前で話す時のコツをつかんだのではないかと、要するに学生とのコミュニケーション能力が増したというのが、数字として出たことが個人的な実感です。ですから、前は相当つまらない授業をやっていたのが、少しはまともな授業になったという、それが私にとっての成果だったような気がいたします。

質問票に、いわゆる単位がないのにどうして学生さんがこんなに参加するのだろうといった疑問がありますが、それぞれの大学で何か学生をその気にさせるためのインセンティブなどありますか。

関西・早川 インセンティブというのは、学生に対してはないです。本学ですと、たとえばキャリアセンターの学生スタッフは活動したら図書カードをもらっていますが、今日ここに来ているコミュニティは特に何か報酬があるということはないのです。ですので、そこに何か学生自身が感じ取るインセンティブがあるのだろうと私もは考えています。

関西・大島 授業を行う中でも、現在ピア・コミュニティで活動している学生たちを集める合宿でも、必ず話に出てくるのが「僕たち、私たちは、自分たちのキャンパスというのは自分たちの視点でもっともっと楽しくなれば、自分たちだけではなくてキャンパスにいるみんなが楽しくなる、そんなことを目指したい」と言うのです。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

私たちが最初はそういうことをさりげなく伝えていたような向きはあったのですけれども、この最終年次を迎えて、学生たちの方からその声が聞こえてくるのです。今前にいる上野が今年の正課授業において、ピア・サポーターの活動というものについて説明に来てくれたのです。彼が言うには「大島先生も、早川さんも、僕も、みんなキャンパスで、みんなが楽しくなりたいという気持ちは一緒なんです」って言っているのです。だから私はもしかしたら、そういう気持ちが彼らは無償でも、どんなに日々問題が起こっても、突き進んでいくエネルギーになっているのかなって感じるがあります。

司会・木原 どうも。土屋さんは、法政代表として。

法政・土屋 確かに単位にもならないし、アルバイト料も発生しない。それでもなお、4年間続けている人たちがいることに疑問があって、私もアンケートを学生スタッフにとってみたのです。それをまとめたものが、さきほどのプレゼンで紹介されたのですけれども、最も多かった理由が3つありました。「コミュニティは新たな出会いがある」とか「成長が実感できた」、これは本当にもっともだと思ったのですが、「学生生活が楽しくなった」、本当にこれだと思うのです。まず、やっている活動が楽しくて、難しいことを考えるのはそれからという、そういう集団でいいと思っていたのですけれども、それは私達教職員も一緒に、やっている仕事楽しくて、そうすれば力が入る、ごく自然なことだと思います。

司会・木原 ありがとうございます。それぞれの立場の関わり方を中心に、質問票にありました内容に触れてみました。

今年度で「GP」という冠はつかなくなりますが、日常的に取り組むということを経験が受け入れなければならぬわけです。もちろん発展させるものもありますが、少なくとも今までやってきた中で、ぜひ継続すべきだと思います。特に学生さんの場合は卒業していくと後輩に託すわけです。後輩には後輩の考え方があります。教員の場合は、私も任期がありまして、昨年、一昨年と市ヶ谷学生センター長、今年はボランティアセンター長2年の任期目ということで関わっているのですが、来年になると自動的に任期が全部なくなってしまいます。職員はある日突然、天の声がして異動になって移っていきます。そういう意味で、どうやって継続していくかを考えていきたいのですが、「ぜひ残していきたいこと」ということで、特に学生の方、どちらも4年生ですから、来年もぜひ継続してもらいたいということがあれば強く語ってください。

関西・上野 僕から発表させていただきたいと思います。僕たちも今日来られている3人の先輩たちから引き継いで、僕たちの学年で4月から始めました。その中で、たとえば企画のやり方、役職、連絡方法など様々な点は変えました。それは別に先輩たちのやり方が嫌いだったからではなくて、新しいやり方など色々と挑戦してみて、もっといいやり方があるのではないかと、僕たち自身もやりやすいし、そのやり方によってもっと関大自体、サポートを受ける一般学生、まだピア・サポートを受けていない学生にとっても、いい方向につながっていくのではないかと思います。なので、もし「引き継いでほしいこと」ということで考えるのであれば、何か一定のことではなくて、常に挑戦し続けて色々なことを試していくような関大独自の風土、ピアが根づいている関大の風土が引き継がれていってくれば、それでいいなと思います。

司会・木原 ありがとうございます。ということは、来年の今頃、ここに来てみんなと同じことをやっていたら、「お前たち、まだ同じことをやっているのか」ってことですか。

関西・上野 それは僕らのやり方が素晴らしかったということで、よろしいのではないのでしょうか。

司会・木原 わかりました。ありがとうございます。鎌田さん、どうですか。

法政・鎌田 GPは終わりますが、KYOPROをはじめ、この7つのプロジェクトはこれからもずっと継続していきたいと思っておりますし、継続できるイベントを多く開催してきました。たとえば「健康みなおし週間」、地域の方々と交流している「チーム阿波踊り」「神楽坂案内ツアー」は、これからも継続していけるイベントですのでやっていきたいと思っております。

私も去年、今日来ていただいている平塚さんから受け継いで、KYOPROを運営しているわけですがけれども、平塚さんの代からいいものは受け継いでいって、変えるべきものは変えたり、新しいことをやってみたり、色々挑戦しているので、後輩にもミーティング方法などいいところはそのまま受け継いでもらいたいですし、その都度、その都度、臨機応変に対応して、よりよい方向に持って行っていただきたいと思っております。

司会・木原 平塚さん、ちょっと立ってください。去年のKYOPROリーダーです。社会人になって戻ってきて、後輩の発表や様子を見て、どうですか。

フロア・平塚 唯々、みなさん頼もしいなと感じています。同時に、先ほど鎌田さんも言われたように、私がリーダーだった時も良いものは引き継いで、あまり良くないと思ったものは変更するのですが、やはり社会人になってみてKYOPROやピア・サポートコミュニティ全体でやったことというのはすごく役立っていると感じます。というのは、現役スタッフは知っていると思いますが、私は口酸っぱく「連絡は確実に」「遅刻しないように」と徹底して話してきました。また、私自身もそれを常に意識して行動しないと「口だけのリーダー」と言われてしまうので、常に実践してきました。そういうことを徹底したおかげで、社会人になっても職場の方々と良好な人間関係で仕事ができていると感じています。ぜひ、これから活動するみなさんも、そういった基礎的な部分をしっかりして活動していただけたら、きっと社会人になっても良好な人間関係を築けるのではないかと思います。

司会・木原 どうもありがとうございます。また、関西大のエースだった山咲さんと松田さんも来られています。ぜひ、ひとことお願いします。

フロア・松田 ただ今紹介にあずかりました関西大学の松田と申します。僕は、早川さんの隣の席で職員としてピア・サポートの支援をしています。特に上野君はしっかりしていて頼もしく感じています。僕らの時は「これからピアをつくっていく」という段階で、人集めや活動の基盤をつくる段階だったと思います。いわば関西大学ピア・コミュニティの種を蒔いたにすぎなかったと思います。その蒔いた種が実際に芽を出して、花を咲かせていく過程を見ていることに僕は毎日幸せを感じておりますし、今後も学生気質がどんどん変わるとは思いますが、それに柔軟に対応しながら、楽しんで活動していってもらえればと感じています。以上です。

司会・木原 どうもありがとうございます。山咲さん、お願いします。

フロア・山咲 今、紹介にあずかりました関西大学の山咲でございます。私は松田と違いまして、学生生活支援グループではなくて、教務事務という試験を担当する部署に配属されております。ピアで活動した理念というものを引き継いで、教務という立場からただ支援し続けるだけでなく、教育という立場で指導することの大切さを学んでおります。ただし、学生のことを考えて教育することの大切さを、ピアをもって学ぶことができたので、それを大切にして今も仕事に励んでおります。以上です。

司会・木原 どうもありがとうございます。文字通り支援される側が支援する側にまわる、という美しい話です。金銭的に考えれば、支援していた側が支援される側にまわった、という考え方も成り立つと思います。結局、コミュニティとして連続性を保つという意味で、こういったOB・OGとのつながりというのは実に大きな意味を持っているのではないかと思います。まだ、どちらのコミュニティもできあがって4年目ということでOB・OGの数も大していませんが、こういったものが継続していくとより裾野の広いコミュニティになっていって、面白いのではないかと期待しております。法政大学も関西大学もこうやって社会人も来てくれていますし、いいですね。ありがとうございます。

それでは、早川さん、土屋さん、それぞれ職員の立場として、これをどういうふうに職場に残していけばいいでしょうか。たとえば、今の忙しい状態を職場に残すのかどうかということです。そういったことも含めてどうでしょう。

関西・早川 残すという方向で継続させるためなのですけれども、今お話がありましたように松田が私の隣の席ということなので、理念・考え方は引き継いでいるのではないかと思います。それをもって、学生と上手く付き合っていっていただければ一番継続性はあるのかなと考えています。ただし、本学の場合、8つのコミュニティがありますが、関連事務局が変わってきます。支援する部署が違うというのは大きな問題の1つになっていると思います。

今回、新たにi.comというピア・コミュニティができました。今コミュニティが8つありますが、時代と共に変わると思うのです。先ほど大島先生がおっしゃいましたが、学生気質が変われば支援する内容も若干変わるかもしれない。コミュニティの目的・趣旨が変わる可能性があれば、支援する部署も変わる可能性があるということで、これは増えるのか減るのかといろんなことを考えながら継続させないといけません。もう1点は、部署が変わりますので、先ほど私が言いましたように教育的立場になっていくということです。元々は課外活動支援・指導してきた側面がありますし、今は教務センターと言っていますが、昔学部事務室の教務部の学生を指導する部署があったのですけれども、今までは単純なサービス提供をしていた。たとえばi.comですと、ITセンターということで、パソコンを設置していただけたので学生とのやりとりはないのです。そういう方々が教育という場に一步踏み出すことになってくる。より、学生に一步近づくということなのです。それを同じ事務職員でありながら、どうお互いが考えを共有し、どのようにこの大学の中でコンスタントに活動していくのかということが、1つ継続性のキーワードになってくるような気がしています。

司会・木原 どうもありがとうございます。結局法政大学でもそうなのですが、職員は学生に付き合って、法政の場合は「学内インターンシップ」という表現を使っていますけれども、要するに学生サポートをするプロの早川さん、土屋さんから学生のサポートの仕方を教わるわけですね。それで、自分で自分たちをサポートする。そういう点では、学内で行うインターンシップ的なものがあるわけで、どのようにすれば学生サポートができるかというのは、早川さんにしても土屋さんにしてもプロフェッショナルなわけですから、その方々が学生に「こうやったらいいのではないかと提案していくということは起こっているわけですね。それが、仕事だからなのか、GPだから許されたのかという問題になっていくのではないかと気がするのですが、土屋さんどうですか。

法政・土屋 あくまで偶然GPに採択されたということで、そういう関わり方もできたのですけれども、基本は一緒だと思います。その中で継続してほしいと望むことは、趣旨通り「学生の力」というものにこだわりますが、私たち職員としては、その「学生の力」を信じてほしいということがあります。さらに教員の方には、日頃プロ意識を持つように言われるのですけれども、教員の方には「職員の力」を信じてほしいと思います。職員が学生

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

の力を信じるというのは、私も今やっていることなのですけれども、自分でやってしまえば早く終わることも気長に待つ。そこに教育的な効果があると考えています。

一方で、職員の力を信じてほしいという点では、宮崎先生にも、木原先生にも、そうしていただいて本当にありがたいのですけれども、今回学生支援GPとは別に、教育GPに申請するという事で、教員2名、職員4名のワーキンググループに声をかけていただいて、そういうところでも「職員の力」を教員の方に認めてもらえるというのは日頃の励みとなって活動しています。学生の力を信じる、職員の力を信じる、両者とも残っていたらいいなと思います。

司会・木原 GPという冠がついているが故にできることと、これがなくなった時にどうするか。先の問題は特に考えたいのですけれども、結局早川さんにしても土屋さんにしても、ある程度そういった学生を教育的に指導する仕事というものを残していきたいという気持ちがあるわけですね。単なる無機質な学生サービスではなくて、学生と面と向かって、ある程度時間をかけてやっていくということを行って来て、多分それを残したいということではないかと思います。

関西・早川 そうですね。今、土屋さんもおっしゃいましたけれども、そういった学生の成長を見守るといいますか、教育システム的な要素はあると思いますので、それをどう残すかがキーワードだと思います。

司会・木原 そうということですね。今度は教員の立場として、こういった学生の、いわゆるコミュニティ活動に役職が解けた場合の関わりなどについてはどうお考えですか。

関西・大島 つい2日前も学生センターで、このGP終了後の取り組みについて1時間半か2時間位話し合う機会がありました。その中で、今、関西大学で考えていることは、これまで正課教育で行ってきたことというのは、ピア・サポートを行うための知識の修得だけだったのです。それを正課教育として取り上げていくという。これも昨今は活動評価というものが教育システムの中に取り入れられるようになってきましたので、それを行っていくことによって、さらに1人ひとりのサポーターとして活動している学生たちの成長をサポートしていければというような話をしている最中です。ですから、役職が解けた後もそういう形でならお手伝いするかなとは思っております。

司会・木原 これは誘導しようと思った方にだんだん近づいてきているのですけれども、結局、教員がたとえば仕事として認めてもらうためには、正課との関連性ってすごく大事なのです。サークルの顧問をやるにしても、何をやるにしても、教員の仕事としては認めてもらえないわけですから。

原先生はどうですか。この後、こういうことに関わっていく—たとえばボランティアセンターなど、今の役職が解けた後に、自分がもし関われるとしたらいかがですか。

法政・原 私は来年3月までがこの役職です。学生センターに携わることによって、先ほど土屋さんがおっしゃっていましたが、教員と職員と学生と一緒に協働して、企画を実現していく、そういう場に居合わせる事ができて、私は本当に幸せだったと思うのです。もっと多くの教員に関わって欲しい。それは学生センター長としてだと、たとえば多摩の場合には学部の順番で私になっているわけですが、そういうものではなくて、です。これは昨日多摩の学生委員会で、先ほど大島先生の言われたような議論をしたところなのです。たとえばボランティアであるとか、多摩キャンパスの学生の活動を教員全体でサポートしていくというシンポジウムを開けないだろうかとか、或いは今、科研費申請の時期ですけれども、そこに学生・院生・教員が連携してやれないだろう

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

かというのを昨日話し合ったばかりなのです。実現するかどうかは、出しても通るかどうかはわかりませんが、すぐにそういうことを言ったからといって、実現できるわけではないと思いますけれども、そういう動きが出てきたところを非常に高く評価できるのではないかと考えていますし、そういうことには積極的に来年度からも関わっていきたいと思っています。

司会・木原 残すためにはどうすればいいかということで、最終的に話をまとめていきたいと思っています。1つのいい例は、ピア・サポートというのは、法政大学でも実現した、例えば先ほど見ている中で「心理学」や「数学」があったのですけれども、色々なサポートをしていくと結局「学ぶこと」をサポートするのが重要ではないかということにだんだん方向が向いていくのです。考えてみたら、色々な意味でのサポートが学生センターを中心に行われていますが、これをもう少し正課に近づけていくことこそが、このプロジェクト、ピア・コミュニティの存在意義ではないかと思いました。その時に、ふと思い出すのが立命館大学で行っている「オリター」というシステムなのです。大変申し訳ないのですけれども、立命館大学の方にご説明いただきたいと思っています。

フロア 立命館大学の河口と申します。立命館大学では、ここ10年位、上回生が新生を学生生活や教学の面からサポートする活動が取り組まれています。学部ごとにオリター団という形で新生をサポートする上回生集団が、規模は学部ごとに異なるのですけれども存在しまして、全学では800名程度の学生が登録をしています。本学の特徴としましては、オリター制度は課外自主活動、サークルといったこととも位置付けています。学生が自主的に運営して、活動しているということが特徴になります。課外活動で対価もお給料も出ない点も、特に2月・3月是一日中新入生を迎えるための準備をして、学生生活のほとんどをそこに費やしてやっているということで、ボランティア精神でここまでできるのかというぐらいの活動をしてきています。

司会・木原 どうもありがとうございます。立命館のオリターの場合は、本当に学生の自主的課外活動として、成り立っているわけです。ただ、この正課のものというのは、たしかオリターは担当の先生と話し合ったりするのです。そういった意味で、教職員との関わりが出てきていると思います。私は個人的には、とにかく正課にこれをどう近づけるかというのが今後の課題ではないかと思っています。これを今後、どういうふうにすれば、上手くつないでいけるかということについて、パネラーの方にそれぞれ話をお伺いしていこうと思います。ただ、幸い法政には担当理事が今ここに同席されていまして、こうした方がいいとここで言うだけで、もしかするとつながるかもしれないということもあります。こういうことがあったらいいじゃないか、ということをご提案いただけたらと思いますが、まず早川さんから。

関西・早川 これを正課に近づけるということで、本学では平成20年度から正課授業を開始いたしまして、ようやく3年目が終了いたしました。正課授業とピア・コミュニティの活動へのリンクというのは、まだそんなに強くない状況にあります。ここをどういうふうにして正課に近づけるかというのが大きいかと思います。その中で、先ほども先生の言葉に「学内インターン」という言葉がありましたけれども、そういった形、もしくは教育実習的な形にもっていくという考え方もあるのかなと思っています。単位というインセンティブが与えられるという中で、何かできるだろうなというイメージは湧くのですけれども、ただ、その効果、カリキュラムもそうですけれども、そういった点を評価することになりますので、そこはどうすべきなのかは、私は回答できない状態にあります。

司会・木原 そうですね。単位に関わる関係と関わらない関係とでは違いが大きいです。私が今たまたま学生スタッフと付き合っていて、うまく付き合えるのは単位が関わっていないからであって、単位が関わったら全く関係性

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

が変わってきてしまいます。土屋さん、何かありますか。

法政・土屋 確かに本学の学生支援 GP の取り組みは完全に正課外の活動なので、ゆくゆくは正課に組み込んでいくというのは、教育 GP のワーキンググループでも話し合われました。そういう意味では、幸いにも KYOPRO にそういうベースができてつあって、既存の正課授業にあるにも関わらず、学生があえてさらに学びたいというニーズでもって、正課外のところで行なっている講座がいくつかあります。今後はそれを発展させていけたらと思います。また、FD にも学生スタッフがいて活発にやっていますから、タイアップしてやっていけたら、より正課に近付いていくのではないかと思います。

司会・木原 正課とのつながりというのは、立命館でやっているように完全に無報酬というか、何もないといったつながり方もある。正課に関わるピア・サポートであって、ピア・サポートそのものを正課と言うと、ちょっと違うと思います。たとえばゼミがあります。ゼミというのは先輩が後輩へ教えることが大きいわけです。それ以外の部分で KYOPRO の取り組みもそうなのですが、15 学部あるわけですから自分が全く聞くことのない、関心を持つことができないような部分を、このピア・サポートで実現していく。正課との関わりというと、単位や報酬というのではなくて、正課の部分をサポートするような関わりがあるのではないかと私は思います。それによって大学の中での存在価値を認めてもらえて、やっていることを仕事として、きちんと評価されるということがあっていいのではないかと思います。

それでは最後にこの取り組みに対して、それぞれの立場から何点かという自己採点をしてもらおうと思います。今度は逆回転で、鎌田さんからお願いします。

法政・鎌田 100 点の活動をしていると思っています。私は4年生なのでもう卒業なのですがけれども、OG となっても、何か関わられるようなサポートができたらいいなと考えています。

法政・土屋 学生の力を含めて100点とさせていただきます。補助金を得て行なっている事業ですので、手は抜けません。

法政・原 学生の活動は100点だと思います。本当に一生懸命やっていますし、成果が着実に表れていると思います。ただ、色々な問題点が見えてきたというところもあるので、さらに良くしていくという意味を含めて80点にしておいた方がいいかなと思います。

関西・上野 ちょっとひねくれた答えばかりで申し訳ないと思うのですがけれども、僕はまだ採点できません。というのは、僕のピア・サポート活動というのはまだ続いていく途中ですし、テストで考えたら、僕の中でまだ、テスト終了のチャイムが鳴っていません。ただ1つ自信を持って言えることは、このピア・サポート活動、僕は関大のピア・コミュニティの最初の立ち上げから関わって今まで全力で走り続けてきました。つまり、テストで言えば、解答用紙に空欄はないようにやってきたという自信だけはあります。そういった点で僕の答えとさせていただきます。

司会・木原 100点ですか？

関西・上野 解答合わせは先生に任せたいと思います。

関西・早川 私の立場から100点と言いたいのですがけれども、だいたい70点と思っています。終盤に近づけ

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

ば近づくほど課題が見えてくるのです。その課題は先ほど「正課」というのも1つのキーワードになりましたし、その前にも提案しました部署間の連携です。学内コンセンサスもそうですが、本学のピア・コミュニティの活動はどんどん広がってきたのですけれども、一番大きな問題がまだ全て支援できる土壌が整っていないことです。この土壌というのは教職員の人材支援もそうなのですから、こういうことをやってみたいのだけれども、どういふふうにできますかというときに学内手続きなど色々あるのです。その手続きがすごく手間がかかったりします。そういったことをもっとシンプルに、もっと単純にできないかなと思っていて、学内の組織的な仕組みも土壌として考えていかないといけないのではないかなと思って70点と考えています。

関西・大島 学生から先生に採点をとられると、教員としては採点せざるを得ません。学生たちが現在取り組んでいる意志でありますとか、このシンポに向けて第一部の準備をしているときに、運営本部の小野澤が「僕、関大の学生がみんなこの仕組みに関わるようなそんなキャンパス、みんなの力で作れたらいいなと思います。」って言うてくれたことが、すごく私は心に残っています。GPに申請をした時に、関大の、あのたくさんの学生みんなにピアの心を宿して、ピア・コミュニティの活動をしなくてもいいから、隣にいる人、それから関大以外でふっと出会った人との間にも様々な心のやり取りができる、そういった人になってほしいということを書きました。そういった意味では、今の段階でうちの子どもたちには、100点をあげたいと思います。ただ、GPの取り組みといたしましては、この子たちをサポートする大学の組織、教員の組織、事務組織、そういったところの兼ね合いを考えると、別の点数を申し上げねばならないかなと思います。大阪には便利な言葉がございます。「ぼちぼちでんな」という、ただ、この言葉は大阪人が申しました時には奥が深こうございます、ということで。

司会・木原 どうもありがとうございました。パネルディスカッションとして、結論を出すというところまでは至っていなかったのですけれども、うまくまとめられなくて申し訳なかったのですが、一応パネルディスカッションはこれにて終わりにさせていただきます。残った時間をパネルディスカッションとは関係ないことも含めて、今日のシンポジウム全体の質問を受け付ける時間とさせていただきますと思います。

フロア ティーチングアシスタントとしてi.comに関わらせていただいております。法政大学に1点お聞きしたいのですが、理系の学生はどれくらい関わっていらっしゃいますか。私自身が理系なので、あまり理系の人影が見えないとちょっと寂しいところがあります。技術的な面も含めて、どれくらい関わっていらっしゃるのか教えていただけますか。

法政・鎌田 KYOPROは市ヶ谷、多摩、小金井と3キャンパスで活動しているのですけれども、小金井が理系のキャンパスでして、今スタッフは10人くらいいます。

法政・土屋 理系の学生に聞くと、終日カリキュラムで詰まっています、その中で+αの活動でこういう課外活動に関わっています。そして、時間をつくってミーティングをして企画を作る。さらに良いことは、文系の学生に交じってくれることで文系の学生にも非常に良い影響があります。ミーティングひとつにしても刺激があるようです。

フロア 理系の学生も関わっていらっしゃるということでしたが、具体的には理系の学生の持っているスキルであったり、スキル以外の内面的な部分であったり、理系の学生のどういったところが活かされていますか。文系の学生と全く同じことをされているのか、あるいは何か違った取り組みをされているのか、どういったことが活かされているのか、何か特徴があれば教えていただけますか。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

法政・土屋 そうですね、確かに理系の学生ならではのプログラムがありました。生命科学部の学生スタッフが考えてくれたものですが、ハイドロゲルという物質に焦点をあてたプログラムです。ハイドロゲルから作ったフィルムがあり、そのフィルムを使うことによって砂漠でも野菜を育てることができるという。それを理系の学生が日頃勉強している中で本当に面白い、文系の学生にもぜひ知って欲しいということで講演会を実施しました。さらに講演だけでなく、実際に栽培した野菜を見る農園見学ツアーもやってくれました。理系の学生から聞かなければ私も知らなかったのでも勉強になりましたし、文系の学生にとっても非常に満足度の高いプログラムとなりました。

フロア ありがとうございます。

司会・木原 他に質問はよろしいですか。それでは、本日のパネルディスカッションと質問に対する答えはこれで終わりということで、どうもご清聴ありがとうございました。

(法政大学・学生センターにて要約)